

CHAPTER 12

ダンブルドアはどこにいて、何をしていたの
だろう？ それから二・三週間、ハリーは校長
先生の姿を二度しか見かけなかった。

食事に顔を見せることさえほとんどなくなっ
た。

ダンブルドアが何日も続けて学校を留守にし
ている、というハーマイオニーの考えは当た
っていると、ハリーは思った。

ダンブルドアは、ハリーの個人教授を忘れて
しまったのだろうか？ 予言に関する何かと結
びつく授業だというダンブルドアの言葉に、
ハリーは力づけられ、慰められたのだが、い
まはちょっと見捨てられたような気がしてい
た。

十月の半ばに、学期最初のホグズミード行き
がやって来た。

ますます厳しくなる学校周辺の警戒措置を考
えると、そういう外出がまだ許可されるだろ
うかと、ハリーは危ぶんでいた。

しかし、実施されると知って、ハリーはうれ
しかった。

数時間でも学校を離れられるのは、いつもい
い気分だった。

外出日の朝は荒れ模様だったが、ハリーは早
く目が覚めて、朝食までの時間を「上級魔法
薬」の教科書を読んで、ゆっくり過ごした。
ふだんは、ベッドに横になって教科書を読ん
だりはしなかった。

ロンがいみじくも言ったように、ハーマイオ
ニー以外の者がそういう行動を取るのは不道
徳であり、ハーマイオニーだけはもともとそ
ういう変人なのだ。

しかしハリーは、プリンスの「上級魔法薬」
はとうてい教科書と呼べるものではないと感
じていた。

じっくりと読めば読むほど、どんなに多くの
ことが書き込まれているかを、ハリーは思い
知らされるのだった。

スラグホーンからの輝かしい評価を勝ち取ら
せてくれた便利なヒントや、魔法薬を作る近
道だけではないものが、そこにはあった。

余白に走り書きしてあるちょっとした呪いや
呪詛は独創的で、バツ印で消してあったり、

Chapter 12

Silver and Opals

Where was Dumbledore, and what was he
doing? Harry caught sight of the headmaster
only twice over the next few weeks. He rarely
appeared at meals anymore, and Harry was
sure Hermione was right in thinking that he
was leaving the school for days at a time. Had
Dumbledore forgotten the lessons he was
supposed to be giving Harry? Dumbledore had
said that the lessons were leading to something
to do with the prophecy; Harry had felt
bolstered, comforted, and now he felt slightly
abandoned.

Halfway through October came their first
trip of the term to Hogsmeade. Harry had
wondered whether these trips would still be
allowed, given the increasingly tight security
measures around the school, but was pleased to
know that they were going ahead; it was
always good to get out of the castle grounds for
a few hours.

Harry woke early on the morning of the trip,
which was proving stormy, and whiled away
the time until breakfast by reading his copy of
Advanced Potion-Making. He did not usually
lie in bed reading his textbooks; that sort of
behavior, as Ron rightly said, was indecent in
anybody except Hermione, who was simply
weird that way. Harry felt, however, that the
Half-Blood Prince's copy of *Advanced Potion-
Making* hardly qualified as a textbook. The
more Harry pored over the book, the more he
realized how much was in there, not only the
handy hints and shortcuts on potions that were

書き直したりしているところを見ると、プリンス自身が考案したものに違いない。ハリーはすでに、プリンスが発明した呪文をいくつか試していた。

足の爪が驚くほど速く伸びる呪詛とか（廊下でクラブに試したときは、とてもおもしろい見物だった）、舌を口蓋に張り付けてしまう呪いとか（油断しているアーガス・フィルチに二度仕掛けて、やんやの喝采を受けた）、それにいちばん役に立つと思われるのが「マフリアート＜耳塞ぎ＞」の呪文で、近くにいる者の耳に正体不明の雑音を聞かせ、授業中に盗み聞きされることなく長時間私語できるという優れものだ。

こういう呪文をおもしろく思わないただ一人の人物は、ハーマイオニーだった。

ハリーが近くにいる誰かにこのマフリアート呪文を使うと、ハーマイオニーはその間中、頑なに非難の表情を崩さず、口をきくことさえ拒絶した。

ベッドに背中をもたれかけながら、プリンスが苦勞したらしい呪文の走り書きをもっとよく確かめようと、ハリーは本を斜めにして見た。

何回もバツ印で消したり書き直したりして、最後にそのページの隅に詰め込むように書かれている呪文だ。

「レビコーパス＜身体浮上（無）＞」

風と霰が容赦なく窓を叩き、ネビルは大きないびきをかいている。

ハリーは括弧書きを見つめた。

無……無言呪文の意味に違いない。ハリーは、まだ無言呪文そのものにてこずっていたので、この無言呪文だけがうまく使えるわけではないと思った。

「闇魔術DADA」の授業のたびに、スネイプはハリーの無言呪文がなっていないと、容赦なく指摘していた。

とは言え、これまでのところ、プリンスのほうがスネイプよりずっと効果的な先生だったのは明らかだ。

特にどこを指す気もなく、ハリーは杖を取り上げてちょっと上に振り、頭の中で「レビコーパス！」と唱えた。

「ああああああああっ！」

earning him such a glowing reputation with Slughorn, but also the imaginative little jinxes and hexes scribbled in the margins, which Harry was sure, judging by the crossings-out and revisions, that the Prince had invented himself.

Harry had already attempted a few of the Prince's self-invented spells. There had been a hex that caused toenails to grow alarmingly fast (he had tried this on Crabbe in the corridor, with very entertaining results); a jinx that glued the tongue to the roof of the mouth (which he had twice used, to general applause, on an unsuspecting Argus Filch); and, perhaps most useful of all, *Muffliato*, a spell that filled the ears of anyone nearby with an unidentifiable buzzing, so that lengthy conversations could be held in class without being overheard. The only person who did not find these charms amusing was Hermione, who maintained a rigidly disapproving expression throughout and refused to talk at all if Harry had used the *Muffliato* spell on anyone in the vicinity.

Sitting up in bed, Harry turned the book sideways so as to examine more closely the scribbled instructions for a spell that seemed to have caused the Prince some trouble. There were many crossings-out and alterations, but finally, crammed into a corner of the page, the scribble:

Levicorpus (nvbl)

While the wind and sleet pounded relentlessly on the windows, and Neville snored loudly, Harry stared at the letters in brackets. *Nvbl* ... that had to mean

閃光が走り、部屋中が、声で一杯になった。ロンの叫び声で、全員が目覚めたのだ。ハリーはびっくり仰天して「上級魔法薬」の本を放り投げた。

ロンはまるで見えない釣り鉤で踝を引っ掛けられたように、

逆さまに宙吊りになっていた。

「ごめん！」ハリーが叫んだ。

ディーンもシェーマスも大笑いし、ネビルはベッドから落ちて立ち上がるころだった。

「待ってて——下ろしてやるから——」

魔法薬の本をあたふた拾い上げ、ハリーは大慌てでページをめくって、さっきのページを探した。

やっとそのページを見つけると、呪文の下に読みにくい文字が詰め込んであった。

これが反対呪文でありますようにと祈りながら判読し、ハリーはその言葉に全神経を集中した。

「リベラコーパス！＜身体自由＞」

また閃光が走り、ロンは、ベッドの上に転落してぐしゃぐしゃになった。

「ごめん」ハリーは弱々しく繰り返した。

ディーンとシェーマスは、まだ大笑いしていた。

「明日は」ロンが布団に顔を押しつけたまま言った。

「目覚まし時計をかけといてくれたほうがありがたいけどな」

二人とも、ウィーズリーおばさんの手編みセーターを何枚も重ね着し、マントやマフラーと手袋を手に持って身支度をすませたころには、ロンのショックも収まっていて、ハリーの新しい呪文は最高におもしろいという意見になっていた。

事実、あまりおもしろいので、朝食の席でハーマイオニーを楽しませようと、すぐさまその話をした。

「……それでさ、また閃光が走って、僕は再びベッドに着地したのである！」

ソーセージを取りながら、ロンはニヤリと笑った。

ハーマイオニーはニコリともせずこの逸話を聞いていたが、そのあと冷やかな非難の眼差しをハリーに向けた。

“nonverbal.” Harry rather doubted he would be able to bring off this particular spell; he was still having difficulty with nonverbal spells, something Snape had been quick to comment on in every D.A.D.A. class. On the other hand, the Prince had proved a much more effective teacher than Snape so far.

Pointing his wand at nothing in particular, he gave it an upward flick and said *Levicorpus!* inside his head.

“Aaaaaaaaargh!”

There was a flash of light and the room was full of voices: Everyone had woken up as Ron had let out a yell. Harry sent *Advanced Potion-Making* flying in panic; Ron was dangling upside down in midair as though an invisible hook had hoisted him up by the ankle.

“Sorry!” yelled Harry, as Dean and Seamus roared with laughter, and Neville picked himself up from the floor, having fallen out of bed. “Hang on — I’ll let you down —”

He groped for the potion book and riffled through it in a panic, trying to find the right page; at last he located it and deciphered one cramped word underneath the spell: Praying that this was the counter-jinx, Harry thought *Liberacorpus!* with all his might.

There was another flash of light, and Ron fell in a heap onto his mattress.

“Sorry,” repeated Harry weakly, while Dean and Seamus continued to roar with laughter.

“Tomorrow,” said Ron in a muffled voice, “I’d rather you set the alarm clock.”

By the time they had got dressed, padding themselves out with several of Mrs. Weasley’s hand-knitted sweaters and carrying cloaks,

「その呪文は、もしかして、またあの魔法薬の本から出たのかしら？」

ハリーはハーマイオニーを睨んだ。

「君って、いつも最悪の結論に飛びつくね？」

「そうなの？」

「さあ……うん、そうだよ。それがどうした？」

「するとあなたは、手書きの未知の呪文をちょっと試してみよう、何が起こるか見てみようと思ったわけ？」

「手書きのどこが悪いって言うんだ？」ハリーは、質問の一部にしか答えたくなかった。

「理由は、魔法省が許可していないかもしれないからです」ハーマイオニーが言った。

「それに」ハリーとロンが「またかよ」とばかり目をグリグリさせたので、ハーマイオニーがつけ加えた。

「私、プリンスがちょっと怪しげな人物だって思いはじめたからよ」

とたんにハリーとロンが、大声でハーマイオニーを黙らせた。

「笑える冗談さ！」

ソーセージの上にケチャップの容器を逆さまにかざしながら、ロンが言った。

「単なるお笑いだよ、ハーマイオニー、それだけさ！」

「踝をつかんで人を逆さ吊りすることが？」ハーマイオニーが言った。

「そんな呪文を考えるために時間とエネルギーを費やすなんて、いったいどんな人？」

「フレッドとジョージ」ロンが肩をすくめた。

「あいつらのやりそうなことさ。それに、えーと——」

「僕の父さん」ハリーが言った。ふと思い出したのだ。

「えっ？」ロンとハーマイオニーが、同時に反応した。

「僕の父さんがこの呪文を使った」ハリーが言った。

「僕——ルーピンがそう教えてくれた」

最後の部分は嘘だった。

本当は、父親がスネイプにこの呪文を使うところを見たのだが、「憂いの師」へのあの旅

scarves, and gloves, Ron's shock had subsided and he had decided that Harry's new spell was highly amusing; so amusing, in fact, that he lost no time in regaling Hermione with the story as they sat down for breakfast.

“... and then there was another flash of light and I landed on the bed again!” Ron grinned, helping himself to sausages.

Hermione had not cracked a smile during this anecdote, and now turned an expression of wintry disapproval upon Harry.

“Was this spell, by any chance, another one from that potion book of yours?” she asked.

Harry frowned at her.

“Always jump to the worst conclusion, don't you?”

“Was it?”

“Well ... yeah, it was, but so what?”

“So you just decided to try out an unknown, handwritten incantation and see what would happen?”

“Why does it matter if it's handwritten?” said Harry, preferring not to answer the rest of the question.

“Because it's probably not Ministry of Magic-approved,” said Hermione. “And also,” she added, as Harry and Ron rolled their eyes, “because I'm starting to think this Prince character was a bit dodgy.”

Both Harry and Ron shouted her down at once.

“It was a laugh!” said Ron, upending a ketchup bottle over his sausages. “Just a laugh, Hermione, that's all!”

“Dangling people upside down by the

のことは、ロンとハーマイオニーに話して
いなかった。

しかしハリーはいま、あるすばらしい可能性
に思い当たった。

「半純血のプリンス」はもしかしたらー

「あなたのお父さまも使ったかもしれない
わ、ハリー」ハーマイオニーが言った。

「でも、お父さまだけじゃない。何人もの人
がこれを使っているところを、私たち見た
わ。忘れたのかしら。人間を宙吊りにして。
眠ったまま、何もできない人たちを浮かべて
移動させていた」

ハリーは、目を見張ってハーマイオニーを見
た。

ハリーもそれを思い出して、気が重くなっ
た。

クィディッチ・ワールドカップでの死喰い人
の行動だった。

ロンが助け舟を出した。

「あれは違う」ロンは確信を持って言った。

「あいつらは悪用していた。ハリーとかハリ
ーの父さんは、ただ冗談でやったんだ。君は
王子様が嫌いなんだよ、ハーマイオニー」
ロンはソーセージを厳めしくハーマイオニー
に突きつけながら、つけ加えた。

「王子が君より魔法薬が上手いから……」

「それとはまったく関係ないわ！」ハーマイ
オニーの頬が紅潮した。

「私はただ、何のための呪文かも知らないの
に使ってみるなんて、とっても無責任だと思
っただけ。それから、まるで称号みたいに
『王子』って言うのはやめて。きっとバカバ
かしいニックネームにすぎないんだから。そ
れに、私にはあまりいい人だとは思えない
わ」

「どうしてそういう結論になるのか、わから
ないな」ハリーが熱くなった。

「もしプリンスが、死喰い人の走りだとした
ら、得意になって『半純血』を名乗ったりし
ないだろう？」

そう言いながら、ハリーは父親が純血だった
ことを思い出したが、その考えを頭から押し
のけた。

それはあとで考えよう……。

「死喰い人の全部が純血だとはかざらない。

ankle?” said Hermione. “Who puts their time
and energy into making up spells like that?”

“Fred and George,” said Ron, shrugging,
“it’s their kind of thing. And, er —”

“My dad,” said Harry. He had only just
remembered.

“What?” said Ron and Hermione together.

“My dad used this spell,” said Harry. “I —
Lupin told me.”

This last part was not true; in fact, Harry
had seen his father use the spell on Snape, but
he had never told Ron and Hermione about that
particular excursion into the Pensieve. Now,
however, a wonderful possibility occurred to
him. Could the Half-Blood Prince possibly be
— ?

“Maybe your dad did use it, Harry,” said
Hermione, “but he’s not the only one. We’ve
seen a whole bunch of people use it, in case
you’ve forgotten. Dangling people in the air.
Making them float along, asleep, helpless.”

Harry stared at her. With a sinking feeling,
he too remembered the behavior of the Death
Eaters at the Quidditch World Cup. Ron came
to his aid.

“That was different,” he said robustly.
“They were abusing it. Harry and his dad were
just having a laugh. You don’t like the Prince,
Hermione,” he added, pointing a sausage at her
sternly, “because he’s better than you at
Potions —”

“It’s got nothing to do with that!” said
Hermione, her cheeks reddening. “I just think
it’s very irresponsible to start performing spells
when you don’t even know what they’re for,
and stop talking about ‘the Prince’ as if it’s his

純血の魔法使いなんて、あまり残っていないわ」

ハーマイオニーが頑固に言い取った。

「純血のふりをした、半純血が大多数だと思う。あの人たちは、マグル生まれだけを憎んでいるのよ。あなたとかロンなら、喜んで仲間に入れるでしょう」

「僕を死喰い人仲間に入れるなんてありえない！」

カッとしたロンが、こんどはハーマイオニーに向かってフォークを振り回し、フォークから食べかけのソーセージが吹っ飛んで、アーニー・マクミランの頭にぶつかった。

「僕の家族は全員、血を裏切った！死喰い人にとっては、マグル生まれと同じぐらい憎いんだ！」

「だけど、僕のことは喜んで迎えてくれるさ」

ハリーは皮肉な言い方をした。

「連中が躍起になって僕のことを殺そうとしなけりゃ、大の仲良しになれるだろう」

これにはロンが笑った。ハーマイオニーでさえ、しぶしぶ笑みを漏らした。

ちょうどそこへ、ジニーが現れて、気分転換になった。

「こんちはっ、ハリー、これをあなたに渡すようにって」

羊皮紙の巻紙に、見覚えのある細長い字でハリーの名前が書いてある。

「ありがと、ジニー……ダンブルドアの次の授業だ！」

巻紙を勢いよく開き、中身を急いで読みながら、ハリーはロンとハーマイオニーに知らせた。

「月曜の夜！」ハリーは急に気分が軽くなり、うれしくなった。

「ジニー、ホグズミードに一緒に行かないか？」ハリーが誘った。

「ディーンと行くわ……向こうで会うかもね」ジニーは手を振って離れながら答えた。

いつものように、フィルチが正面の櫨の木の扉のところに立って、ホグズミード行きの許可を得ている生徒の名前を照らし合わせて印をつけていた。

title, I bet it's just a stupid nickname, and it doesn't seem as though he was a very nice person to me!"

"I don't see where you get that from," said Harry heatedly. "If he'd been a budding Death Eater he wouldn't have been boasting about being 'half-blood,' would he?"

Even as he said it, Harry remembered that his father had been pure-blood, but he pushed the thought out of his mind; he would worry about that later. ...

"The Death Eaters can't all be pure-blood, there aren't enough pure-blood wizards left," said Hermione stubbornly. "I expect most of them are half-bloods pretending to be pure. It's only Muggle-borns they hate, they'd be quite happy to let you and Ron join up."

"There is no way they'd let me be a Death Eater!" said Ron indignantly, a bit of sausage flying off the fork he was now brandishing at Hermione and hitting Ernie Macmillan on the head. "My whole family are blood traitors! That's as bad as Muggle-borns to Death Eaters!"

"And they'd love to have me," said Harry sarcastically. "We'd be best pals if they didn't keep trying to do me in."

This made Ron laugh; even Hermione gave a grudging smile, and a distraction arrived in the shape of Ginny.

"Hey, Harry, I'm supposed to give you this."

It was a scroll of parchment with Harry's name written upon it in familiar thin, slanting writing.

"Thanks, Ginny ... It's Dumbledore's next

フィルチが「詮索センサー」で全員を一人三回も検査するので、いつもよりずっと時間がかかった。

「闇の品物を外に持ち出したら、何か問題あるのか？」

「詮索センサー」を心配そうにじろじろ見ながら、ロンが問い質した。

「帰りに中に持ち込む物をチェックすべきなんじゃないか？」

生意気の報いに、ロンは「センサー」で二、三回よけいに突っつかれ、三人で風と雲の中に歩み出したときも、まだ痛そうに顔をしかめていた。

ホグズミードまでの道程は、楽しいとは言えなかった。

ハリーは顔の下半分にマフラーを巻きつけたが、さらされている肌がとりヒリ痛み、すぐにかじかんだ。

村までの道は、刺すような向かい風に体を折り曲げて進む生徒で一杯だった。

暖かい談話室で過ごしたほうがよかったのではないかと、ハリーは一度ならず思った。

やっとホグズミードに着いてみると、ゾンコの悪戯専門店の板が打ちつけてあるのが見えた。

ハリーは、この遠足は楽しくないと、これで決まったように思った。

ロンは手袋に分厚く包まれた手で、ハニーデュークスの店を指した。ありがたいことに開いている。

ハリーとハーマイオニーは、ロンの進むあとをよろめきながらついて歩き、混んだ店に入った。

「助かったぁ」

ヌガーの香りがする暖かい空気に包まれ、ロンが身を震わせた。

「午後はずっとここにしようよ」

「やあ、ハリー！」三人の後ろで声が轟いた。

「しまった」ハリーが呟いた。

三人が振り返ると、スラグホーン先生がいた。

巨大な毛皮の帽子に、お揃いの毛皮襟のついたオーバーを着て、砂糖漬けパイナップルの大きな袋を抱え、少なくとも店の四分の一を

lesson!” Harry told Ron and Hermione, pulling open the parchment and quickly reading its contents. “Monday evening!” He felt suddenly light and happy. “Want to join us in Hogsmeade, Ginny?” he asked.

“I’m going with Dean — might see you there,” she replied, waving at them as she left.

Filch was standing at the oak front doors as usual, checking off the names of people who had permission to go into Hogsmeade. The process took even longer than normal as Filch was triple-checking everybody with his Secrecy Sensor.

“What does it matter if we’re smuggling Dark stuff OUT?” demanded Ron, eyeing the long thin Secrecy Sensor with apprehension. “Surely you ought to be checking what we bring back IN?”

His cheek earned him a few extra jabs with the Sensor, and he was still wincing as they stepped out into the wind and sleet.

The walk into Hogsmeade was not enjoyable. Harry wrapped his scarf over his lower face; the exposed part soon felt both raw and numb. The road to the village was full of students bent double against the bitter wind. More than once Harry wondered whether they might not have had a better time in the warm common room, and when they finally reached Hogsmeade and saw that Zonko’s Joke Shop had been boarded up, Harry took it as confirmation that this trip was not destined to be fun. Ron pointed, with a thickly gloved hand, toward Honeydukes, which was mercifully open, and Harry and Hermione staggered in his wake into the crowded shop.

“Thank God,” shivered Ron as they were

占領していた。

「ハリー、わたしのディナーをもう三回も逃したですよ！」

ハリーの胸を機嫌よく小突いて、スラグホーンが言った。

「それじゃあいけないよ、君。絶対に君を呼ぶつもりだ！ ミス・グレンジャーは気に入ってくれている。そうだね？」

「はい」 ハーマイオニーはしかたなく答えた。「本当にー」

「だから、ハリー、来ないかね？」 スラグホーンが詰め寄った。

「ええ、先生、僕、クィディッチの練習があったものですから」

ハリーが言った。スラグホーンから紫のリボンで飾った小さな招待状が送られてきたときは、たしかに、いつも練習の予定とちがっていた。

この戦略のおかげで、ロンは取り残されることがなく、ジニーと三人で、ハーマイオニーがマクラーゲンやザビニと一緒に閉じ込められている様子を想像しては、笑っていた。

「そりゃあ、そんなに熱心に練習したのだから、むろん最初の試合に勝つことを期待してるよ！」

スラグホーンが言った。

「しかし、ちょっと息抜きをしても悪くはない。さあ、月曜日の夜はどうかね。こんな天気じゃあ、とても練習したいとは思わないだろう……」

「だめなんです、先生。僕ーあのーその晩ダンブルドア先生との約束があって」

「こんどもついてない！」

スラグホーンが大げさに嘆いた。

「ああ、まあ……永久にわたしを避け続けることはできないよ、ハリー！」

スラグホーンは堂々と手を振り、短い足でよちよちと店から出ていった。

ロンのことはまるで「ゴキブリ・ゴソゴソ豆板」の展示品であるかのように、ほとんど見向きもしなかった。

「こんども逃れおおせたなんて、信じられない」 ハーマイオニーが頭を振りながら言った。

「そんなにひどいというわけでもないのよ…

enveloped by warm, toffee-scented air. “Let’s stay here all afternoon.”

“Harry, m’boy!” said a booming voice from behind them.

“Oh no,” muttered Harry. The three of them turned to see Professor Slughorn, who was wearing an enormous furry hat and an overcoat with matching fur collar, clutching a large bag of crystalized pineapple, and occupying at least a quarter of the shop.

“Harry, that’s three of my little suppers you’ve missed now!” said Slughorn, poking him genially in the chest. “It won’t do, m’boy, I’m determined to have you! Miss Granger loves them, don’t you?”

“Yes,” said Hermione helplessly, “they’re really —”

“So why don’t you come along, Harry?” demanded Slughorn.

“Well, I’ve had Quidditch practice, Professor,” said Harry, who had indeed been scheduling practices every time Slughorn had sent him a little, violet ribbon-adorned invitation. This strategy meant that Ron was not left out, and they usually had a laugh with Ginny, imagining Hermione shut up with McLaggen and Zabini.

“Well, I certainly expect you to win your first match after all this hard work!” said Slughorn. “But a little recreation never hurt anybody. Now, how about Monday night, you can’t possibly want to practice in this weather. …”

“I can’t, Professor, I’ve got — er — an appointment with Professor Dumbledore that evening.”

「…まあまあ楽しいときだってあるわ……」
しかしそのとき、ハーマイオニーはちらりと
ロンの表情をとらえた。

「あ、見てー『デラックス砂糖羽根ペン』
があるーこれって何時間も持つわよ！」
ハーマイオニーが話題を変えてくれたことで
ほっとして、ハリーは新商品の特大砂糖羽根
ペンに、ふだん見せないような強い関心を示
して見せた。

しかしロンは塞ぎ込んだままで、ハーマイオ
ニーが次はどこに行こうかと聞いても肩をす
くめただけだった。

「『三本の箒』に行こうよ」ハリーが言っ
た。

「きっと暖かいよ」

三人は、マフラーを顔に巻き直し、菓子店を
出た。

ハニーデュークスの甘い温もりのあとは、な
おさら冷たい風が、顔をナイフのように刺し
た。

通りは人影もまばらで、立ち話をする人もな
く、誰もが目的地に急いでいた。

例外は少し先にいる二人の男で、ハリーたち
の行く手の、「三本の箒」の前に立っていた。

一人はとても背が高く痩せている。

雨に濡れたメガネを通して、ハリーが目を細
めて見ると、ホグズミードにあるもう一軒の
パブ、「ホグズ・ヘッド」で働くバーテン
だとわかった。

ハリー、ロン、ハーマイオニーが近づくと、
その男はマントの襟をきつく閉め直して立ち
去った。

残された背の低い男は、腕に抱えた何かをぎ
ごちなく扱っている。

すぐそばまで近づいて初めて、ハリーはその
男が誰かに気づいた。

「マンダンガス！」

赤茶色のざんばら髪にガ二股のずんぐりした
男は、飛び上がって、くたびれたトランクを
落とした。

トランクがパツクリと開き、ガラクタ店のショ
ーウィンドウをそっくり全部ぶちまけたよ
うなありさまになった。

「ああ、よう、アリー」

“Unlucky again!” cried Slughorn
dramatically. “Ah, well ... you can’t evade me
forever, Harry!”

And with a regal wave, he waddled out of
the shop, taking as little notice of Ron as
though he had been a display of Cockroach
Clusters.

“I can’t believe you’ve wriggled out of
another one,” said Hermione, shaking her head.
“They’re not *that* bad, you know. ... They’re
even quite fun sometimes. ...” But then she
caught sight of Ron’s expression. “Oh, look —
they’ve got deluxe sugar quills — those would
last hours!”

Glad that Hermione had changed the
subject, Harry showed much more interest in
the new extra-large sugar quills than he would
normally have done, but Ron continued to look
moody and merely shrugged when Hermione
asked him where he wanted to go next.

“Let’s go to the Three Broomsticks,” said
Harry. “It’ll be warm.”

They bundled their scarves back over their
faces and left the sweetshop. The bitter wind
was like knives on their faces after the sugary
warmth of Honeydukes. The street was not
very busy; nobody was lingering to chat, just
hurrying toward their destinations. The
exceptions were two men a little ahead of
them, standing just outside the Three
Broomsticks. One was very tall and thin;
squinting through his rain-washed glasses
Harry recognized the barman who worked in
the other Hogsmeade pub, the Hog’s Head. As
Harry, Ron, and Hermione drew closer, the
barman drew his cloak more tightly around his
neck and walked away, leaving the shorter man

マンダンガス・フレッチャーは何でもない様子を見事にやり撥ねた。

「いや、かまわず行っちくれ」
そして這いつくばってトランクの中身を掻き集めはじめたが、「早くずらかりたい」という雰囲気丸出しだった。

「こういうのを売ってるの？」
マンダンガスが地面を引っ掻くようにして、汚らしい雑多な品物を拾い集めるのを見ながら、ハリーが聞いた。

「ああ、ほれ、ちっとは稼がねえとな」マンダンガスが答えた。

「そいつをよこせ！」
ロンが屈んで何か銀色の物を拾い上げていた。

「待てよ」ロンが何か思い当たるように言った。

「どっかで見たような……」

「あんがとよ！」

マンダンガスは、ロンの手からゴブレットを引ったくり、トランクに詰め込んだ。

「さて、そんじゃみんな、またなイチッ！」

ハリーがマンダンガスの喉首を押さえ、パブの壁に押しつけた。

片手でしっかり押さえながら、ハリーは杖を取り出した。

「ハリー！」ハーマイオニーが悲鳴を上げた。

「シリウスの屋敷からあれを盗んだな」
ハリーはマンダンガスに鼻がくっつくほど顔を近づけた。

湿気た煙草や酒の嫌な臭いがした。

「あれにはブラック家の家紋がついている」
「俺は——うんにゃ——なんだって——？」
マンダンガスは泡を食ってプツプツ言いながら、だんだん顔が紫色になってきた。

「何をしたんだ？ シリウスが死んだ夜、あそこに戻って根こそぎ盗んだのか？」

ハリーが歯をむいて唸った。

「俺は——うんにゃ——」

「それを渡せ！」

「ハリー、そんなことダメよ！」ハーマイオニーがけたたましい声を上げた。

マンダンガスが青くなり始めていた。

to fumble with something in his arms. They were barely feet from him when Harry realized who the man was.

“Mundungus!”

The squat, bandy-legged man with long, straggly, ginger hair jumped and dropped an ancient suitcase, which burst open, releasing what looked like the entire contents of a junk shop window.

“Oh, ’ello, ’Arry,” said Mundungus Fletcher, with a most unconvincing stab at airiness. “Well, don’t let me keep ya.”

And he began scrabbling on the ground to retrieve the contents of his suitcase with every appearance of a man eager to be gone.

“Are you selling this stuff?” asked Harry, watching Mundungus grab an assortment of grubby-looking objects from the ground.

“Oh, well, gotta scrape a living,” said Mundungus. “Gimme that!”

Ron had stooped down and picked up something silver.

“Hang on,” Ron said slowly. “This looks familiar —”

“Thank you!” said Mundungus, snatching the goblet out of Ron’s hand and stuffing it back into the case. “Well, I’ll see you all — OUCH!”

Harry had pinned Mundungus against the wall of the pub by the throat. Holding him fast with one hand, he pulled out his wand.

“Harry!” squealed Hermione.

“You took that from Sirius’s house,” said Harry, who was almost nose to nose with Mundungus and was breathing in an unpleasant smell of old tobacco and spirits.

バーンと昔がして、ハリーは自分の手がマンダンガスの喉から弾かれるのを感じた。喘ぎながら早口でプツプツ言い、落ちたトランクをつかんで――バチン――マンダンガスは「姿くらまし」した。

ハリーは、マンダンガスの行方を捜してその場をぐるぐる回りながら、声をかざりに悪態をついた。

「戻ってこい！。この盗っ人――！」

「ムダだよ、ハリー」

トンクスがどこからともなく現れた。くすんだ茶色の髪が曇で濡れている。

「マンダンガスは、いまごろたぶんロンドンにいる。喚いてもムダだよ」

「あいつはシリウスの物を盗んだ！盗んだんだ！」

「そうだね。だけど」

トンクスは、この情報にまったく動じないように見えた。

「寒いところにいちゃだめだ」

トンクスは三人が「三本の箒」の入口に入るまで見張っていた。

中に入るなり、ハリーは喚き出した。

「あいつはシリウスの物を盗んでいたんだ！」

「わかってるわよ、ハリー。だけどお願いだから大声出さないで。みんなが見てるわ」ハーマイオニーが小声で言った。

「あそこに座って。飲み物を持ってきてあげる」

数分後、ハーマイオニーがバタービールを三本持ってテーブルに戻ってきたときも、ハリーはまだいきり立っていた。

「騎士団はマンダンガスを抑えきれないのか？」

ハリーはカッカしながら小声で言った。

「せめて、あいつが本部にいるときだけでも、盗むのをやめさせられないのか？固定でない物なら何でも、片っ端から盗んでるのに」

「シーッ！」ハーマイオニーが周りを見回して、誰も聞いていないことを確かめながら、必死で制止した。

魔法戦士が二人近くに腰掛けて、興味深そうにハリーを見つめていたし、ザビニはそう遠

“That had the Black family crest on it.”

“I — no — what — ?” spluttered Mundungus, who was slowly turning purple.

“What did you do, go back the night he died and strip the place?” snarled Harry.

“I — no —”

“Give it to me!”

“Harry, you mustn’t!” shrieked Hermione, as Mundungus started to turn blue.

There was a bang, and Harry felt his hands fly off Mundungus’s throat. Gasping and spluttering, Mundungus seized his fallen case, then — *CRACK* — he Disapparated.

Harry swore at the top of his voice, spinning on the spot to see where Mundungus had gone.

“COME BACK, YOU THIEVING — !”

“There’s no point, Harry.”

Tonks had appeared out of nowhere, her mousy hair wet with sleet.

“Mundungus will probably be in London by now. There’s no point yelling.”

“He’s nicked Sirius’s stuff! Nicked it!”

“Yes, but still,” said Tonks, who seemed perfectly untroubled by this piece of information. “You should get out of the cold.”

She watched them go through the door of the Three Broomsticks.

The moment he was inside, Harry burst out, “*He was nicking Sirius’s stuff!*”

“I know, Harry, but please don’t shout, people are staring,” whispered Hermione. “Go and sit down, I’ll get you a drink.”

Harry was still fuming when Hermione returned to their table a few minutes later

くないところで柱にもたれかかっていた。
「ハリー、私だって怒ると思うわ。あの人が盗んでいるのは、あなたの物だってことを知ってるしー」
ハリーはバタービールに咽せた。
自分がグリモールド・プレイス十二番地の所有者であることを、一時的に忘れていた。
「そうだ、あれは僕のものだ！」ハリーが言った。
「道理であいつ、僕を見てまずいと思ったわけだ！ うん、こういうことが起こっているって、ダンブルドアに言おう。マンダンガスが恐いのはダンブルドアだけだし」
「いい考えだわ」
ハーマイオニーが小声で言った。
ハリーが静まってきたので、安堵したようだ。
「ロン、何を見つめてるの？」
「何でもない」
ロンは慌ててバーから目を逸らしたが、ハリーにはわかっていた。
曲線美の魅力的な女主人、マダム・ロスメルタに、ロンは長いこと密かに思いを寄せていて、いまでもその視線をとらえようとしていたのだ。
「『何でもない』さんは、裏のほうで、ファイア・ウィスキーを補充していらっしやると思いますわ」
ハーマイオニーが嫌味ったらしく言った。
しロンはこの突っ込みを無視して、バタービールをチビチビやりながら、威厳ある沈黙、と自分ではそう思い込んでいるらしい感度を取っていた。
ハリーはシリウスのことを考えていた——いずれにせよシリウスは、あの銀のゴブレットをととても憎んでいた。
ハーマイオニーは、ロンとバーとに交互に目を走らせながら、イライラと机を指で叩いていた。
ハリーが瓶の最後の一滴を飲み干したとたん、ハーマイオニーが言った。
「今日はもうこれでおしまいにして、学校に帰らない？」
二人は頷いた。楽しい遠足とは言えなかったし、天気もここにいる間にどんどん悪くなっ

holding three bottles of butterbeer.

“Can’t the Order control Mundungus?” Harry demanded of the other two in a furious whisper. “Can’t they at least stop him stealing everything that’s not fixed down when he’s at headquarters?”

“Shh!” said Hermione desperately, looking around to make sure nobody was listening; there were a couple of warlocks sitting close by who were staring at Harry with great interest, and Zabini was lolling against a pillar not far away. “Harry, I’d be annoyed too, I know it’s your things he’s stealing —”

Harry gagged on his butterbeer; he had momentarily forgotten that he owned number twelve, Grimmauld Place.

“Yeah, it’s my stuff!” he said. “No wonder he wasn’t pleased to see me! Well, I’m going to tell Dumbledore what’s going on, he’s the only one who scares Mundungus.”

“Good idea,” whispered Hermione, clearly pleased that Harry was calming down. “Ron, what are you staring at?”

“Nothing,” said Ron, hastily looking away from the bar, but Harry knew he was trying to catch the eye of the curvy and attractive barmaid, Madam Rosmerta, for whom he had long nursed a soft spot.

“I expect ‘nothing’s’ in the back getting more firewhisky,” said Hermione waspishly.

Ron ignored this jibe, sipping his drink in what he evidently considered to be a dignified silence. Harry was thinking about Sirius, and how he had hated those silver goblets anyway. Hermione drummed her fingers on the table, her eyes flickering between Ron and the bar. The moment Harry drained the last drops in his

ていた。

マントをきっちり体に巻きつけ直し、マフラーを調えて手袋をはめた三人は、友達と一緒にパブを出ていくケイティ・ベルのあとに続いて、ハイストリート通りを戻りはじめた。凍った霧の道をホグワーツに向かって一歩一歩踏みしめながら、ハリーはふとジニーのことを考えた。

ジニーには出会わなかった。

当然だ、とハリーは思った。

ディーンと二人でマダム・パディフットの喫茶店にとっぴり閉じこもっているんだ。

あの幸せなカップルの溜まり場に。

ハリーは顔をしかめ、前屈みになって渦巻く霧に突っ込むように歩き続けた。

ケイティ・ベルと友達の声が風に運ばれて、後ろを歩いていたハリーの耳に届いていたが、しばらくしてハリーは、その声が叫ぶような大声になったのに気づいた。

ハリーは目を細めて、二人のぼんやりした姿を見ようとした。

ケイティが手に持っている何かをめぐって、二人が口論していた。

「リーアン、あなたには関係ないわ！」ケイティの声が聞こえた。

小道の角を曲がると、霧はますます激しく吹きつけ、ハリーのメガネを曇らせた。手袋をした手でメガネを拭こうとしたとたん、リーアンがケイティの持っている包みをぐいとかんだ。

ケイティが引っぱり返し、包みが地面に落ちた。

その瞬間、ケイティが宙に浮いた。

ロンのように踝から吊り下がった滑稽な姿ではなく、飛び立つ瞬間のように優雅に両手を伸ばしている。

しかし、何かおかしい、何か不気味だ……激しい風に煽られた髪が顔を打っているが、両眼を閉じ、虚ろな表情だ。

ハリー、ロン、ハーマイオニーもリーアンも、その場に釘づけになって見つめた。

やがて、地上二メートルの空中で、ケイティが恐ろしい悲鳴を上げた。

両眼をカツと見開き、何を見たのか、何を感じ

bottle she said, “Shall we call it a day and go back to school, then?”

The other two nodded; it had not been a fun trip and the weather was getting worse the longer they stayed. Once again they drew their cloaks tightly around them, rearranged their scarves, pulled on their gloves, then followed Katie Bell and a friend out of the pub and back up the High Street. Harry’s thoughts strayed to Ginny as they trudged up the road to Hogwarts through the frozen slush. They had not met up with her, undoubtedly, thought Harry, because she and Dean were cozily closeted in Madam Puddifoot’s Tea Shop, that haunt of happy couples. Scowling, he bowed his head against the swirling sleet and trudged on.

It was a little while before Harry became aware that the voices of Katie Bell and her friend, which were being carried back to him on the wind, had become shriller and louder. Harry squinted at their indistinct figures. The two girls were having an argument about something Katie was holding in her hand. “It’s nothing to do with you, Leanne!” Harry heard Katie say.

They rounded a corner in the lane, sleet coming thick and fast, blurring Harry’s glasses. Just as he raised a gloved hand to wipe them, Leanne made to grab hold of the package Katie was holding; Katie tugged it back and the package fell to the ground.

At once, Katie rose into the air, not as Ron had done, suspended comically by the ankle, but gracefully, her arms outstretched, as though she was about to fly. Yet there was something wrong, something eerie. ... Her hair was whipped around her by the fierce wind, but her eyes were closed and her face was quite empty

じたのか、ケイティはその何かのせいで、恐ろしい苦悶に苛まれている。

ケイティは叫び続けた。

リーアンも悲鳴を上げ、ケイティの踝をつかんで地上に引き戻そうとした。

ハリー、ロン、ハーマイオニーも駆け寄って助けようとした。

しかし、みんなで脚をつかんだ瞬間、ケイティが四人の上に落下してきた。

ハリーとロンがなんとかそれを受け止めはしたが、ケイティがあまりに激しく身をよじるので、とても抱き止めていられなかった。

地面に下ろすと、ケイティはそこでのたうち回り、絶叫し続けた。

誰の顔もわからないようだ。

ハリーは周りを見回した。まったく人気がない。

「ここにいてくれ！」

吠え猛る風の中、ハリーは大声を取り上げた。

「助けを呼んでくる！」

ハリーは学校に向かって疾走した。

いまのケイティのようなありさまは見たことがないし、何が原因かも思いつかなかった。小道のカーブを飛ぶように回り込んだとき、後足で立ち上がった巨大な熊のようなものに衝突して静ね返された。

「ハグリッド！」

生垣にはまり込んだ体を解き放ちながら、ハリーは息を弾ませて言った。

「ハリー！」

眉毛にも髭にも鬘を貯めたハグリッドは、いつものボサボサしたビーバー皮のかいオーバーを着ていた。

「グロウプに会いにいつてきたとこだ。あいつはほんとに進歩してな、おまえさん、きつー」

「ハグリッド、あっちに怪我人がいる。呪いか何かにやられたー」

「あー？」

風の唸りでハリーの言ったことが聞き取れず、ハグリッドは身を屈めた。

「呪いをかけられたんだ！」ハリーが大声を上げた。

「呪い？ 誰がやられたーロンやハーマイオ

of expression. Harry, Ron, Hermione, and Leanne had all halted in their tracks, watching.

Then, six feet above the ground, Katie let out a terrible scream. Her eyes flew open but whatever she could see, or whatever she was feeling, was clearly causing her terrible anguish. She screamed and screamed; Leanne started to scream too and seized Katie's ankles, trying to tug her back to the ground. Harry, Ron, and Hermione rushed forward to help, but even as they grabbed Katie's legs, she fell on top of them; Harry and Ron managed to catch her but she was writhing so much they could hardly hold her. Instead they lowered her to the ground where she thrashed and screamed, apparently unable to recognize any of them.

Harry looked around; the landscape seemed deserted.

“Stay there!” he shouted at the others over the howling wind. “I’m going for help!”

He began to sprint toward the school; he had never seen anyone behave as Katie had just behaved and could not think what had caused it; he hurtled around a bend in the lane and collided with what seemed to be an enormous bear on its hind legs.

“Hagrid!” he panted, disentangling himself from the hedgerow into which he had fallen.

“Harry!” said Hagrid, who had sleet trapped in his eyebrows and beard, and was wearing his great, shaggy beaverskin coat. “Jus’ bin visitin’ Grawp, he’s comin’ on so well yeh wouldn’ —”

“Hagrid, someone’s hurt back there, or cursed, or something —”

“Wha?” said Hagrid, bending lower to hear

ニーじゃねえだろうな？」
「違う、二人じゃない。ケイティ・ベルだー
ーこっち……」
二人は小道を駆け戻った。
ケイティを囲む小さな集団を見つけるのに、
そう時間はかからなかった。
ケイティはまだ地べたで身悶えし、叫び続け
ていた。
ロン、ハーマイオニー、リーアンが、ケイテ
ィを落ち着かせようとしていた。
「下がっとなれ！」ハグリッドが叫んだ。
「見せてみる！」
「ケイティがどうにかなっちゃったの！」リ
ーアンがすすり泣いた。
「何が起こったのかわからないー」
ハグリッドは一瞬ケイティを見つめ、それか
ら一言も言わずに身を屈めてケイティを抱き
取り、城のほうに走り去った。
数秒後には、耳を劈くようなケイティの悲鳴
が聞こえなくなり、ただ風の唸りだけが残っ
た。
ハーマイオニーは、泣きじゃくっているケイ
ティの友達のところへ駆け寄り、肩を抱い
た。
「リーアン、だったわね？」
友達が頷いた。
「突然起こったことなの？ それとも……？」
「包みが破れたときだったわ」
リーアンは、地面に落ちていまやぐしょ濡れ
になっている茶色の紙包みを指差しながら、
すすり上げた。
破れた包みの中に、緑色がかった光る物が見
える。
ロンは手を伸ばして屈んだが、ハリーがその
腕をつかんで引き戻した。
「触るな！」ハリーがしゃがんだ。
装飾的なオパールネックレスが、紙包みか
らはみ出して覗いていた。
「見たことがある」ハリーはじっと見つめな
がら言った。
「ずいぶん前になるけど、ボージン・アン
ド・パークスに飾ってあった。説明書きに、
呪われているって書いてあった。ケイティは
これに触ったに違いない」
ハリーは、激しく震え出していたリーアンを

what Harry was saying over the raging wind.

“Someone’s been cursed!” bellowed Harry.

“Cursed? Who’s bin cursed — not Ron? Hermione?”

“No, it’s not them, it’s Katie Bell — this way …”

Together they ran back along the lane. It took them no time to find the little group of people around Katie, who was still writhing and screaming on the ground; Ron, Hermione, and Leanne were all trying to quiet her.

“Get back!” shouted Hagrid. “Lemme see her!”

“Something’s happened to her!” sobbed Leanne. “I don’t know what —”

Hagrid stared at Katie for a second, then without a word, bent down, scooped her into his arms, and ran off toward the castle with her. Within seconds, Katie’s piercing screams had died away and the only sound was the roar of the wind.

Hermione hurried over to Katie’s wailing friend and put an arm around her.

“It’s Leanne, isn’t it?”

The girl nodded.

“Did it just happen all of a sudden, or — ?”

“It was when that package tore,” sobbed Leanne, pointing at the now sodden brown-paper package on the ground, which had split open to reveal a greenish glitter. Ron bent down, his hand outstretched, but Harry seized his arm and pulled him back.

“Don’t touch it!”

He crouched down. An ornate opal necklace was visible, poking out of the paper.

見上げた。

「ケイティはどうやってこれを手に入れたの？」

「ええ、そのことで口論になったの。ケイティは『三本の箒』のトイレから出てきたとき、それを持っていて、hogwartsの誰かへの内緒のプレゼントだから、自分が届けなきゃいけないって言ってたわ。そのときの顔がとて変だった……あっ、あっ、きっと『服従の呪文』にかかっていたんだわ。わたし、それに気がつかなかった！」

リーアンは体を震わせて、またすすり泣きはじめた。

ハーマイオニーは優しくその肩を叩いた。

「リーアン、ケイティは誰からもらったかを言ってなかった？」

「ううん……教えてくれなかったわ……それでわたし、あなたはバカなことをやっている、学校には持っていくなって言ったの。でも全然聞き入れなくて、そして……それでわたしが引たくろうとして……それで——それで——」リーアンが絶望的な泣き声を上げた。

「みんな学校に戻ったほうがいいわ」ハーマイオニーが、リーアンの肩を抱いたまま言った。

「ケイティの様子がわかるでしょう。さあ……」

ハリーは一瞬迷ったが、マフラーを顔からはずし、ロンが息を呑むのもかまわず、慎重にマフラーでネックレスを覆って拾い上げた。

「これをマダム・ボンフリーに見せる必要がある」ハリーが言った。

ハーマイオニーとリーアンを先に立てて歩きながら、ハリーは必死に考えをめぐらしていた。

校庭に入ったとき、もはや自分の胸だけにとどめておけずに、ハリーは口をきいた。

「マルフォイがこのネックレスのことを知っている。四年前、ボージン・アンド・バックスのショーケースにあった物だ。僕がマルフォイや父親から隠れているとき、マルフォイはこれをしっかり見ていた。僕たちがあいつの跡をつけて行った日に、あいつが買ったのはこれなんだ！これを憶えていて、買いに戻

“I’ve seen that before,” said Harry, staring at the thing. “It was on display in Borgin and Burkes ages ago. The label said it was cursed. Katie must have touched it.” He looked up at Leanne, who had started to shake uncontrollably. “How did Katie get hold of this?”

“Well, that’s why we were arguing. She came back from the bathroom in the Three Broomsticks holding it, said it was a surprise for somebody at Hogwarts and she had to deliver it. She looked all funny when she said it. ... Oh no, oh no, I bet she’d been Imperiused and I didn’t realize!”

Leanne shook with renewed sobs. Hermione patted her shoulder gently.

“She didn’t say who’d given it to her, Leanne?”

“No ... she wouldn’t tell me ... and I said she was being stupid and not to take it up to school, but she just wouldn’t listen and ... and then I tried to grab it from her ... and — and —”

Leanne let out a wail of despair.

“We’d better get up to school,” said Hermione, her arm still around Leanne. “We’ll be able to find out how she is. Come on. ...”

Harry hesitated for a moment, then pulled his scarf from around his face and, ignoring Ron’s gasp, carefully covered the necklace in it and picked it up.

“We’ll need to show this to Madam Pomfrey,” he said.

As they followed Hermione and Leanne up the road, Harry was thinking furiously. They had just entered the grounds when he spoke,

ったんだ!」

「さあ—どうかな、ハリー」ロンが遠慮がちに言った。

「ボージン・アンド・バークスに行くやつはたくさんいるし……それに、あのケイティの友達、ケイティが女子トイレであれを手に入れたって言わなかったか?」

「女子トイレから出てきたときにあれを持っていたって言った。トイレの中で手に入れたとはかざらない—」

「マクゴナガルが来る!」ロンが警告するように言った。

ハリーは顔を上げた。

たしかにマクゴナガル先生が、雲の渦巻く中を、みんなを迎えに石段を駆け下りてくるところだった。

「ハグリッドの話では、ケイティ・ベルがあのようになったのを、あなたたち四人が目撃したと—さあ、いますぐ上の私の部屋に!ポッター何を持っているのですか?」

「ケイティが触れた物です」ハリーが言った。

「なんとまあ」

マクゴナガル先生は警戒するような表情で、ハリーからネックレスを受け取った。

「いえ、いえ、フィルチ、この生徒たちは私と一緒にです!」

マクゴナガル先生が急いで言った。

フィルチが待ってましたとばかり「詮索センサー」を高々と掲げ、玄関ホールの向こうからドタドタやってくるころだった。

「このネックレスを、すぐにスネイプ先生のところへ持っていきなさい。ただし、決して触らないよう。マフラーに包んだままですよ!」

ハリーもほかの三人と一緒に、マクゴナガル先生に従って上階の先生の部屋に行った。

窓ガラスに雲が打ちつけ、窓枠の中でガタガタ揺れていた。

火格子の上で火が爆ぜているにもかかわらず、部屋は薄寒かった。

マクゴナガル先生はドアを閉め、さっと机の向こう側に回って、ハリー、ロン、ハーマイオニー、そしてまだすすり泣いているリーアンと向き合った。

unable to keep his thoughts to himself any longer.

“Malfoy knows about this necklace. It was in a case at Borgin and Burkes four years ago, I saw him having a good look at it while I was hiding from him and his dad. *This* is what he was buying that day when we followed him! He remembered it and he went back for it!”

“I — I dunno, Harry,” said Ron hesitantly. “Loads of people go to Borgin and Burkes ... and didn’t that girl say Katie got it in the girls’ bathroom?”

“She said she came back from the bathroom with it, she didn’t necessarily get it in the bathroom itself —”

“McGonagall!” said Ron warningly.

Harry looked up. Sure enough, Professor McGonagall was hurrying down the stone steps through swirling sleet to meet them.

“Hagrid says you four saw what happened to Katie Bell — upstairs to my office at once, please! What’s that you’re holding, Potter?”

“It’s the thing she touched,” said Harry.

“Good lord,” said Professor McGonagall, looking alarmed as she took the necklace from Harry. “No, no, Filch, they’re with me!” she added hastily, as Filch came shuffling eagerly across the entrance hall holding his Secrecy Sensor aloft. “Take this necklace to Professor Snape at once, but be sure not to touch it, keep it wrapped in the scarf!”

Harry and the others followed Professor McGonagall upstairs and into her office. The sleet-spattered windows were rattling in their frames, and the room was chilly despite the fire crackling in the grate. Professor McGonagall

「それで？」先生は鋭い口調で言った。
「何があったのですか？」
鳴咽を抑えるのに何度も言葉を切りながら、リーアンはたどたどしくマクゴナガル先生に話した。
ケイティが「三本の箒」のトイレに入り、どこの店の物ともわからない包みを手にして戻ってきたこと、ケイティの表情が少し変わったこと、得体の知れない物を届けると約束することが適切かどうかで口論になったこと、口論の果てに包みの奪い合いになり、包みが破れて開いたこと。
そこまで話すと、リーアンは感情が昂り、それ以上一言も聞き出せない状態だった。
「結構です」マクゴナガル先生の口調は、冷たくはなかった。
「リーアン、医務室においでなさい。そして、マダム・ボンフリーから何かショックに効く物をもらいなさい」
リーアンが部屋を出ていった後、マクゴナガル先生はハリー、ロン、ハーマイオニーに顔を向けた。
「ケイティがネックレスに触れたとき、何が起こったのですか？」
「宙に浮きました」ロンやハーマイオニーが口を開かないうちに、ハリーが言った。
「それから悲鳴を上げはじめて、そのあとに落下しました。先生、ダンブルドア校長にお目にかかりますか？」
「ポッター、校長先生は月曜日までお留守です」マクゴナガル先生が驚いた表情で言った。
「留守？」ハリーは憤慨したように繰り返した。
「そうです、ポッター、お留守です！」マクゴナガル先生はピシッと言った。
「しかし、今回の恐ろしい事件に関してのあなたの言い分でしたら、私に言ってもかまわないはずです！」
ハリーは一瞬迷った。
マクゴナガル先生は、秘密を打ち明けやすい人ではない。
ダンブルドアには、いろいろな意味でもっと畏縮させられるが、それでも、どんなに突拍子もない説でも嘲笑される可能性が少ないよ

closed the door and swept around her desk to face Harry, Ron, Hermione, and the still sobbing Leanne.

“Well?” she said sharply. “What happened?”

Haltingly, and with many pauses while she attempted to control her crying, Leanne told Professor McGonagall how Katie had gone to the bathroom in the Three Broomsticks and returned holding the unmarked package, how Katie had seemed a little odd, and how they had argued about the advisability of agreeing to deliver unknown objects, the argument culminating in the tussle over the parcel, which tore open. At this point, Leanne was so overcome, there was no getting another word out of her.

“All right,” said Professor McGonagall, not unkindly, “go up to the hospital wing, please, Leanne, and get Madam Pomfrey to give you something for shock.”

When she had left the room, Professor McGonagall turned back to Harry, Ron, and Hermione.

“What happened when Katie touched the necklace?”

“She rose up in the air,” said Harry, before either Ron or Hermione could speak, “and then began to scream, and collapsed. Professor, can I see Professor Dumbledore, please?”

“The headmaster is away until Monday, Potter,” said Professor McGonagall, looking surprised.

“Away?” Harry repeated angrily.

“Yes, Potter, away!” said Professor McGonagall tartly. “But anything you have to

うに思われた。

しかし、こんどのは生死に関わる。

笑い者になることなど心配している場合ではない。

「先生、僕は、ドラコ・マルフォイがケイティにネックレスを渡したのだと思います」
ハリーの脇で、明らかに当惑したロンが、鼻をこすり、一方ハーマイオニーは、ハリーとの間に少し距離を置きたくてしかたがないかのように、足をもじもじさせた。

「ポッター、それは由々しき告発です」
衝撃を受けたように間を置いたあと、マクゴナガル先生が言った。

「証拠がありますか？」

「いいえ」ハリーが言った。

「でも……」そしてハリーは、マルフォイを追跡してボージン・アンド・バークスに行ったこと、三人が盗み聞きしたマルフォイとボージンの会話のことを話した。

ハリーが話し終わったとき、マクゴナガル先生はやや混乱した表情だった。

「マルフォイは、ボージン・アンド・バークスに何か修理する物を持っていったのですか？」

「違います、先生。ボージンから何かを修理する方法を聞き出したかっただけです。物は持っていませんでした。でもそれが問題ではなくて、マルフォイは同時に何かを買ったんです。僕はそれがあのネックレスだと——」

「マルフォイが、似たような包みを持って店から出てくるのを見たのですか？」「いいえ、先生。マルフォイはボージンに、それを店で保管しておくようにと言いました……」

「でも、ハリー」ハーマイオニーが口を挟んだ。

「ボージンがマルフォイに、品物を持って行ってはどうかと言ったとき、マルフォイは『いいや』って——」

「それは、自分が触りたくなかったからだ。はっきりしてる！」ハリーがいきり立った。

「マルフォイは実はこう言ったわ。『そんな物を持って通りを歩いたら、どういう目で見られると思うんだ-』」ハーマイオニーが言った。

「そりゃ、ネックレスを手にとってたら、ち

say about this horrible business can be said to me, I'm sure!"

For a split second, Harry hesitated. Professor McGonagall did not invite confidences; Dumbledore, though in many ways more intimidating, still seemed less likely to scorn a theory, however wild. This was a life-and-death matter, though, and no moment to worry about being laughed at.

"I think Draco Malfoy gave Katie that necklace, Professor."

On one side of him, Ron rubbed his nose in apparent embarrassment; on the other, Hermione shuffled her feet as though quite keen to put a bit of distance between herself and Harry.

"That is a very serious accusation, Potter," said Professor McGonagall, after a shocked pause. "Do you have any proof?"

"No," said Harry, "but ..." and he told her about following Malfoy to Borgin and Burkes and the conversation they had overheard between him and Mr. Borgin.

When he had finished speaking, Professor McGonagall looked slightly confused.

"Malfoy took something to Borgin and Burkes for repair?"

"No, Professor, he just wanted Borgin to tell him how to mend something, he didn't have it with him. But that's not the point, the thing is that he bought something at the same time, and I think it was that necklace ——"

"You saw Malfoy leaving the shop with a similar package?"

"No, Professor, he told Borgin to keep it in the shop for him ——"

よっと間が抜けて見えるだろうな」
ロンが口を挟んだ。

「ロンったら」ハーマイオニーがお手上げだ
という口調で言った。

「ちゃんと包んであるはずだから、触らなくて
すむでしょうし、マントの中に簡単に隠せる
から、誰にも見えないはずだわ！ マルフォ
イがボージン・アンド・バークスに何を保管
しておいたにせよ、騒がしい物か嵩張る物
よ。それを運んで道を歩いたら人目を引くこ
とになるような、そういう何かだわ……それ
に、いずれにせよ」

ハーマイオニーは、ハリーに反論される前
に、声を張り上げてぐいぐい話を進めた。

「私がボージンにネックレスのことを聞いた
のを、憶えている？ マルフォイが何を置き
くように頼んだのか調べようとして店に入っ
たとき、ネックレスがあるのを見たわ。ところ
が、ボージンは簡単に値段を教えてくれた。
もう売約済みだなんて言わなかったー」

「そりゃ、君がとてもわざとらしかったか
ら、あいつは五秒も経たないうちに君の狙い
を見破ったんだ。もちろん君には教えなかつ
ただろうさーどっちにしろ、マルフォイ
は、あとで誰かに引き取りに行かせることだ
って……」

「もう結構！」

ハーマイオニーが憤然と反論しようとして口
を開きかけると、マクゴナガル先生が言っ
た。

「ポッター、話してくれたことはありがたく
思います。しかし、あのネックレスが売られ
たと思われる店に行ったという、ただそれだ
けで、ミスター・マルフォイに嫌疑をかける
ことはできません。同じことが、ほかの何百
人という人に対しても言えるでしょうー」

「ー僕もそう言ったんだ、」ロンがブツブ
ツ呟いた。

「ーいずれにせよ、今年は嚴重な警護対策
を施してあります。あのネックレスが私たち
の知らないうちに校内に入るということは、
とても考えられませんー」

「ーでもー」

「ーさらにですー」マクゴナガル先生

“But Harry,” Hermione interrupted, “Borgin
asked him if he wanted to take it with him, and
Malfoy said no —”

“Because he didn’t want to touch it,
obviously!” said Harry angrily.

“What he actually said was, ‘How would I
look carrying that down the street?’ ” said
Hermione.

“Well, he would look a bit of a prat carrying
a necklace,” interjected Ron.

“Oh, Ron,” said Hermione despairingly, “it
would be all wrapped up, so he wouldn’t have
to touch it, and quite easy to hide inside a
cloak, so nobody would see it! I think whatever
he reserved at Borgin and Burkes was noisy or
bulky, something he knew would draw
attention to him if he carried it down the street
— and in any case,” she pressed on loudly,
before Harry could interrupt, “I asked Borgin
about the necklace, don’t you remember?
When I went in to try and find out what
Malfoy had asked him to keep, I saw it there.
And Borgin just told me the price, he didn’t
say it was already sold or anything —”

“Well, you were being really obvious, he
realized what you were up to within about five
seconds, of course he wasn’t going to tell you
— anyway, Malfoy could’ve sent off for it
since —”

“That’s enough!” said Professor
McGonagall, as Hermione opened her mouth
to retort, looking furious. “Potter, I appreciate
you telling me this, but we cannot point the
finger of blame at Mr. Malfoy purely because
he visited the shop where this necklace might
have been purchased. The same is probably
true of hundreds of people —”

は、威厳ある最後通告の雰囲気と言った。
「ミスター・マルフォイは今日、ホグズミードに行きませんでした」
ハリーは空気が抜けたように、ポカンと先生を見つめた。
「どうしてご存知なんですか、先生？」
「なぜなら、私が罰則を与えたからです。変身術の宿題を、二度も続けてやってこなかったのです。そういうことですから、ポッター、あなたが私に疑念を話してくれたことには礼を言います」
マクゴナガルは、三人の前を決然と歩きながら言った。
「しかし私はもう、ケイティ・ベルの様子を見に病棟に行かなければなりません。三人とも、お帰りなさい」
マクゴナガル先生は、部屋のドアを開けた。三人とも、それ以上何も言わずに並んで出ていくしかなかった。
ハリーは、二人がマクゴナガルの肩を持ったことに腹を立てていた。
にもかかわらず、事件の話が始まると、どうしても話に加わりたくなかった。
「それで、ケイティは誰にネックレスをやるはずだったと思う？」
階段を上って談話室に向かいながらロンが言った。
「いったい誰かしら」ハーマイオニーが言った。
「誰にせよ、九死に一生だわ。誰だってあの包みを開けたら、必ずネックレスに触れてしまったでしょうから」
「対象になる人は大勢いたはずだ」ハリーが言った。
「ダンブルドアー死喰い人はきっと始末したいだろうな。狙う相手としては順位の高い一人に違いない。それともスラグホーナーダンブルドアは、ヴォルデモートが本気であの人を手に入れたがっていたと考えている。だから、あの人ダンブルドアに与したとなれば、連中はうれしくないよ。それともー」
「あなたかも」ハーマイオニーは心配そうだった。
「ありえない」ハリーが言った。

“— that’s what I said —” muttered Ron.

“— and in any case, we have put stringent security measures in place this year. I do not believe that necklace can possibly have entered this school without our knowledge —”

“But —”

“— and what is more,” said Professor McGonagall, with an air of awful finality, “Mr. Malfoy was not in Hogsmeade today.”

Harry gaped at her, deflating.

“How do you know, Professor?”

“Because he was doing detention with me. He has now failed to complete his Transfiguration homework twice in a row. So, thank you for telling me your suspicions, Potter,” she said as she marched past them, “but I need to go up to the hospital wing now to check on Katie Bell. Good day to you all.”

She held open her office door. They had no choice but to file past her without another word.

Harry was angry with the other two for siding with McGonagall; nevertheless, he felt compelled to join in once they started discussing what had happened.

“So who do you reckon Katie was supposed to give the necklace to?” asked Ron, as they climbed the stairs to the common room.

“Goodness only knows,” said Hermione. “But whoever it was has had a narrow escape. No one could have opened that package without touching the necklace.”

“It could’ve been meant for loads of people,” said Harry. “Dumbledore — the Death Eaters would love to get rid of him, he must be one of their top targets. Or Slughorn

「それなら、ケイティは道でちょっと振り返って僕に渡せばよかったじゃないか。僕は、『三本の箒』からずっとケイティの後ろにいた。ホグワーツの外で渡すほうが合理的だろ？ なにしろフィルチが、出入りする者全員を検査してる。城の中に持ち込めなんて、どうしてマルフォイはケイティにそう言いつけたんだろう？」

「ハリー、マルフォイはホグズミードにいなかったのよ！」

ハーマイオニーはイライラのあまり地団駄を踏んでいた。

「なら、共犯者を使ったんだ」ハリーが言った。

「クラブかゴイル……それとも、考えてみれば、死喰い人だったかもしれない。マルフォイにはクラブやゴイルよくもっとまじな仲間がたくさんいるはずだ。マルフォイはもうその一員なんだし……」

ロンとハーマイオニーは顔を見合わせた。明らかに「この人とは議論してもムダ」という目つきだった。

「ディリグロウト」

「太った婦人」のところまで来て、ハーマイオニーがはっきり唱えた。

肖像画がパッと開き、三人を談話室に入れた。

中はかなり混んでいて、湿った服の臭いがした。

悪天候のせいで、ホグズミードから早めに帰ってきた生徒が多いようだった。

しかし、恐怖や憶測でざわついてはいない。ケイティの悲運のニュースは、明らかにまだ広まっていなかった。

「よく考えてみりゃ、あれはうまい襲い方じゃなかったよ、ほんと」

暖炉のそばのいい肘掛椅子の一つに座っていた一年生を、気楽に追い立てて自分が座りながら、ロンが言った。

「呪いは城までたどり着くことさえできなかった。成功間違いなしってやつじゃないな」

「そのとおりよ」ハーマイオニーが足でロンを突ついて立たせ、椅子を一年生に返してやった。

「熟慮の策とはとても言えないわね」

— Dumbledore reckons Voldemort really wanted him and they can't be pleased that he's sided with Dumbledore. Or —”

“Or you,” said Hermione, looking troubled.

“Couldn't have been,” said Harry, “or Katie would've just turned around in the lane and given it to me, wouldn't she? I was behind her all the way out of the Three Broomsticks. It would have made much more sense to deliver the parcel outside Hogwarts, what with Filch searching everyone who goes in and out. I wonder why Malfoy told her to take it into the castle?”

“Harry, Malfoy wasn't in Hogsmeade!” said Hermione, actually stamping her foot in frustration.

“He must have used an accomplice, then,” said Harry. “Crabbe or Goyle — or, come to think of it, another Death Eater, he'll have loads better cronies than Crabbe and Goyle now he's joined up —”

Ron and Hermione exchanged looks that plainly said *There's no point arguing with him*.

“Dilligrout,” said Hermione firmly as they reached the Fat Lady.

The portrait swung open to admit them to the common room. It was quite full and smelled of damp clothing; many people seemed to have returned from Hogsmeade early because of the bad weather. There was no buzz of fear or speculation, however: Clearly, the news of Katie's fate had not yet spread.

“It wasn't a very slick attack, really, when you stop and think about it,” said Ron, casually turfing a first year out of one of the good armchairs by the fire so that he could sit down. “The curse didn't even make it into the castle.

<p>「だけど、マルフォイはいつから世界一の策士になったって言うんだい？」</p> <p>ハリーが反論した。ロンもハーマイオニーも答えなかった。</p>	<p>Not what you'd call foolproof.”</p> <p>“You're right,” said Hermione, prodding Ron out of the chair with her foot and offering it to the first year again. “It wasn't very well thought-out at all.”</p> <p>“But since when has Malfoy been one of the world's great thinkers?” asked Harry.</p> <p>Neither Ron nor Hermione answered him.</p>
--	---